



門へ速 137
第 769
巻 3



實

八屋の賣物八百色に限らず學者の十屋されぬ物多し大を
沿いんと欲されば駱駝山驕もよりありやう少と譚らるるを
角觥の一段もあれば好く人少世之雪も敷るを堅
のを悦ばざるは林春の喉ももて足るも神事舞のするを雲雀
獨樂より速く藤八五文のさるも機關泉も終不及はるる去
年の流行より今茲の不易あるまじきと云ふより先き
傾城水戸の初編の評判す野と波は橋本に鶴られ申すも
のりまうと云ふは三紋の二まむ四條の燈心もとも氣根と云
夜並仕度も癖の憑るるけの本店遅の業をせしめられ鶴
屋の頭を長く七松も壽く千世萬代春の仕入るるを合
るだうく急々如律令法實の通り女子さる序き

曲亭馬琴識



ナハセトハ二編

明治三十八年十月十三日
坪内雄新氏寄贈

幾くはし

たきり

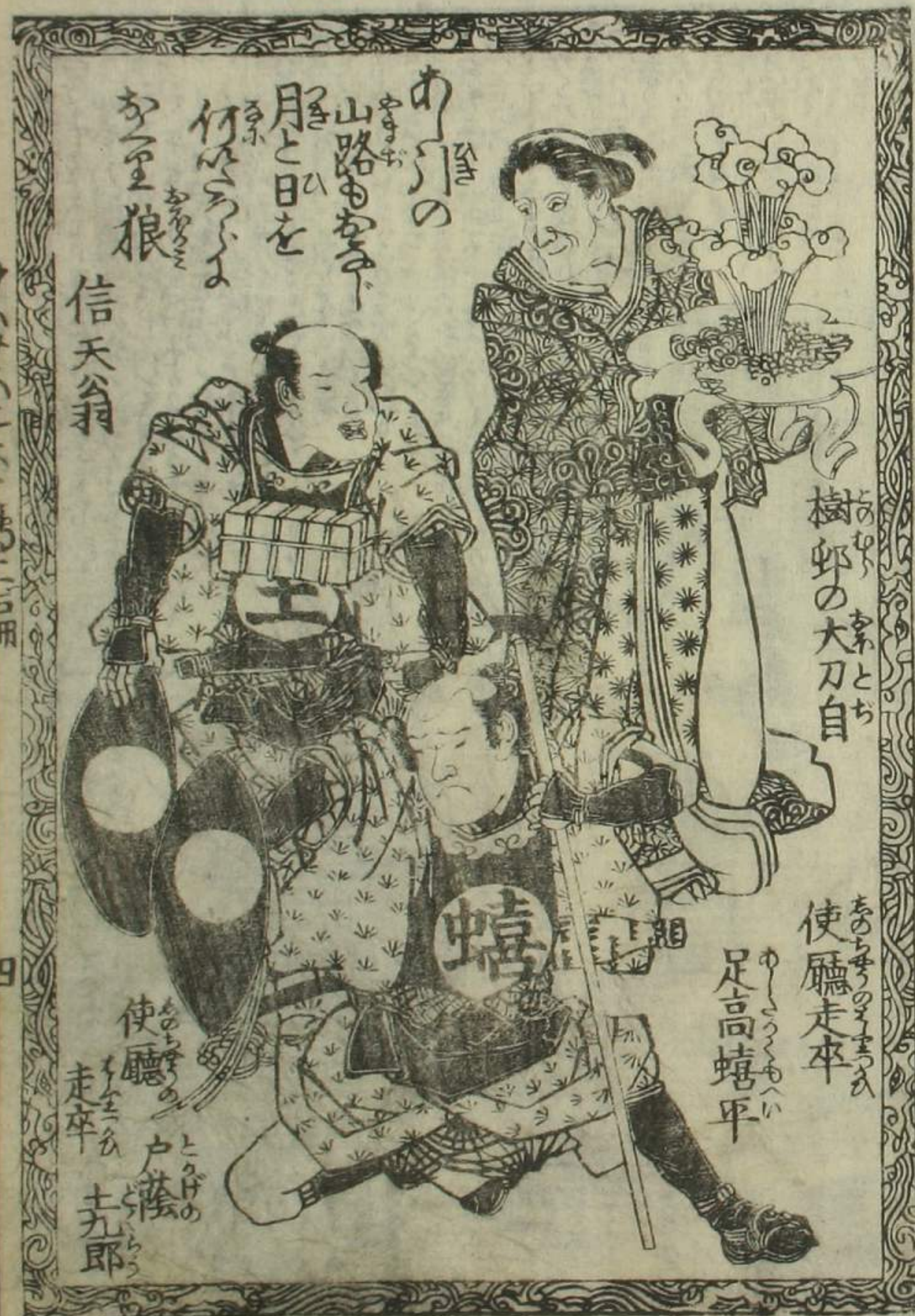
かきり

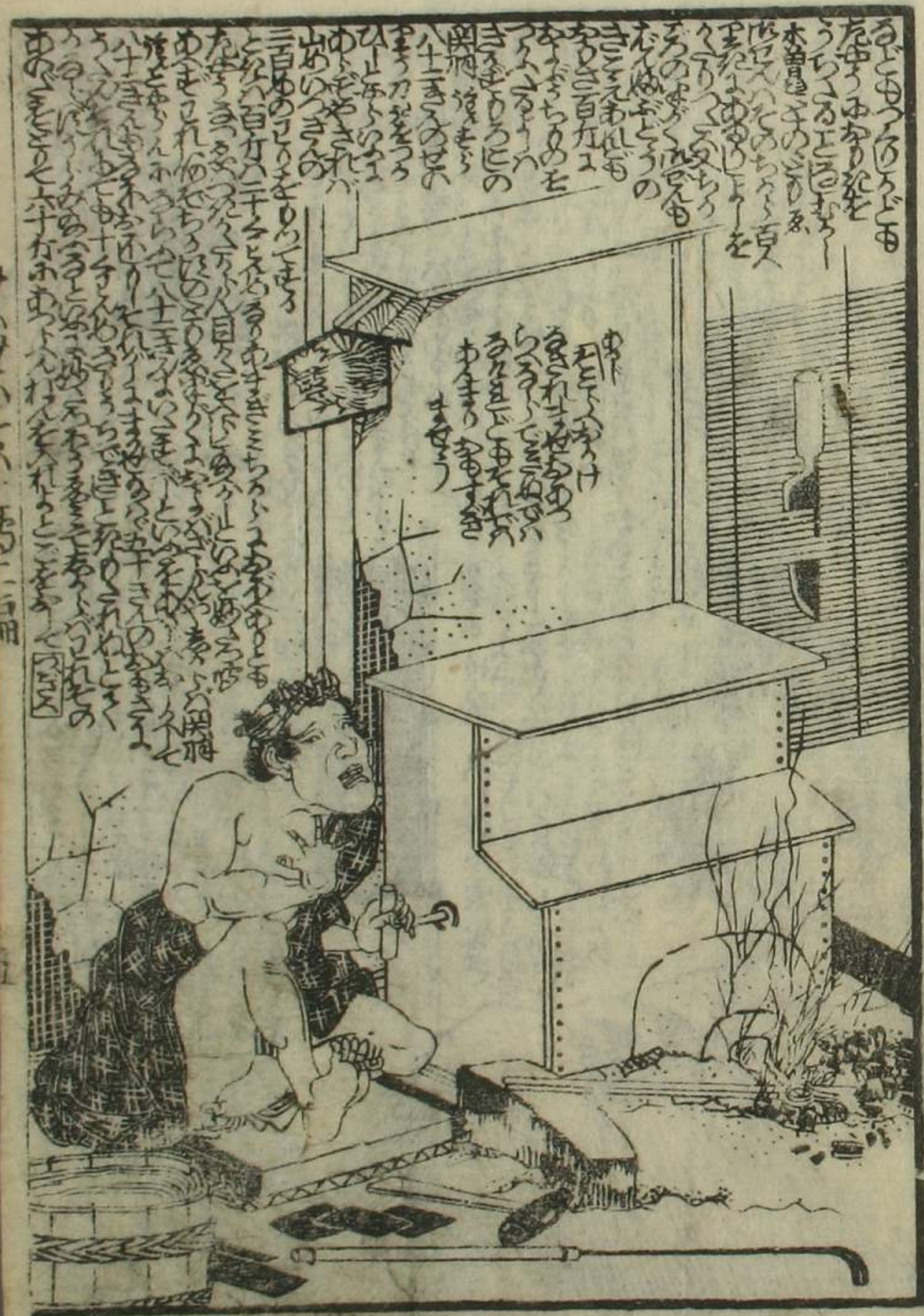
名人堂





東京市立区六人保
餘丁町百拾番地
坪内雄藏











二編

f

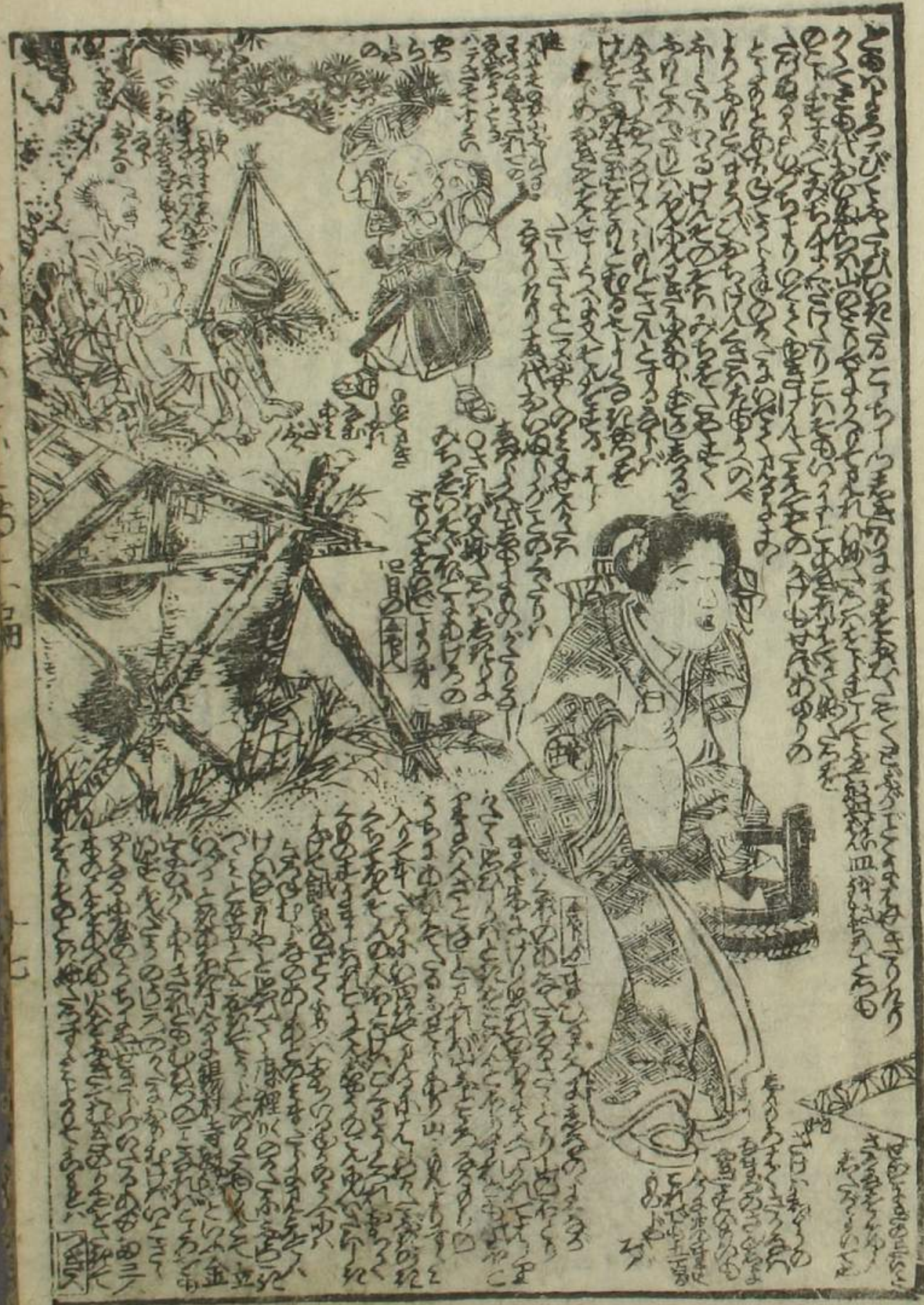














ナハタハ二一編





為
知
如

